



漢詩を味わう

第154回

こうなんのはる
江南春

とぼく
杜牧

千里鶯啼緑映紅

せんりゆうぐいすな
千里鶯啼いて緑紅に映ず

水村山郭酒旗風

すいそんさんかく
水村山郭 酒旗の風

南朝四百八十寺

なんちよう
南朝 四百八十寺

多少樓台煙雨中

たしやう
多少の樓台 煙雨の中

千里四方にウグイスが鳴き、そして柳の緑がくれないの花と照り映えている。

水辺の村、山すその村には酒場の幟が春風になびいている。

このあたり一帯は南朝時代以来、数多くの寺院があったが、いまなおたくさんさんの樓閣が春の霧雨にけぶっている。

《江南》 長江下流の南の地方。

《鶯》 コウライウグイスで、日本の鶯よりも大きくて黄色い。

《千里》 見渡す限り、どこもかしこも。千里四方もあるひろびろとしたところ。

《水村》 水辺の村。

《山郭》 山あいの村。

《酒旗》 酒屋の看板の旗で竹竿につけてある。

《南朝》 南北朝時代に今の南京を都として宋・斉・梁・陳の四王朝を北朝に対して言う。

《多少》 「多」に意味の重点があり「たくさん」の。

杜牧（八〇三〜八五二）は京兆万年（西安市）の人で晩唐を代表する詩人です。二十六歳で進士に合格し、有能な官僚としてエリートコースを踏み出します。揚州に赴任した若いころ享樂的な生活を送ったこともありましたが、一生を通じて強い経世の抱負を抱き、政策上や軍事上の著述も残しています。中年以降は自ら希望して地方官を歴任しています。杜甫が「老杜」と呼ばれるのに対して杜牧は「小杜」と呼ばれます。

この詩は杜牧の傑作として有名です。山川の美に恵まれた古都南京一帯の春景色を絵画的に巧みに捉えています。

前半では晴天下の明るい農村風景を描写し、後半は雨にけぶる古い都のたずまいを詠みます。全く違うものを一つの詩に詠み込んでいて、一見前後矛盾するようですが、詩の題名の「江南の春」というテーマに沿って、江南の景物を組み合わせた詩です。言わばオムニバス形式です。

前半の第一句は江南の広々とした農村の風景を、高いところから見渡したような表現です。

そして第二句でグッと近い景色を捉えて、川のほとり、山あいの村にたなびく酒屋の幟に着目します。

後半は一転して雨の風景です。南朝時代の四百八十もの寺、そのたくさんさんの樓台が煙雨のなかに見えます。南朝時代、とくに梁は仏教の栄えた華やかな時代で、四百八十はおろか六百余りも寺院あったといえます。ちなみに、十は平仄（漢詩の韻律の決まり）によって「しん」と読みます。

唐時代になると、都が長安に移り南京は一地方都市となり、往時の栄華はなくなっていて、この詩にも栄枯盛衰の感傷ムードが漂っています。それでも人々にとって江南といえは温暖で美しい土地というイメージは変わらず、明るい農村風景と春雨にしっかりと濡れた古都という情景を巧みに組み合わせて、江南の風光を捉えて余すところがありません。

参考文献・漢詩の世界（大修館書店）・漢詩の事典（大修館書店）

酒に対して暝るるを覚えす 落花我が衣に盈つ 酔いより起きて溪月に歩む 鳥還つて人も亦た稀なり

教
五
不
覺
暝
落
花
盈
我
衣
醉

起
步
溪
月
鳥
還
人
亦
稀

《大意》酒とさし向かいでいたら、日の暮れたのに気づかなかった。散りしきる花びらが、わたしの衣服にみちていた。酔ったあとの眠りから醒めて、月明かりの谷川をそぞろ歩きすれば、鳥たちはねぐらに帰り、人影もまた稀であった。(李白詩・自ら遣る)

句を得るは新意に因る 書に耽るは是宿縁

得
句
因
新
意
得
句
因
新
意

耽
書
是
宿
縁
耽
書
是
宿
縁

《大意》詩句を得るのは新しい工夫により、書物に耽るのは前世からの宿命である。(許有玉)

水 遠
静 鷗
浮

読み

遠鷗えんおうは水に浮かんで静かに（遠くに浮かぶカモメは静かに水に浮かび）

佐藤象雲書

草書

行書

水静
遠鷗浮

水静
遠鷗浮

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

次号課題

隸書

風斜
輕燕受

水静
遠鷗浮

けいえん
輕燕は風を受けること斜めなり

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支部		順位		氏名	
折もあれ					
五月美く北の旅					

森 鷗外

和泉 溪石 先生書

渠荷的歴園莽抽條
 渠荷的歴園莽抽條
 渠荷的歴園莽抽條

佐藤 象雲 書

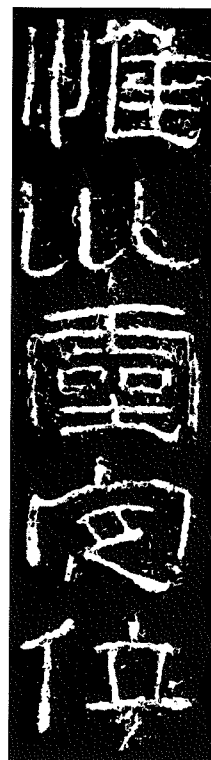
音

キヨカテキレキ
エンモウチユウジヨウ

略解

庭の蓮の花はあざやかに色映え
草木の枝葉存分に伸び

唯 唯
 位 位
 唯 唯



唯れ坤^こ靈^{こん}、位^いを定め……

■石門頌^{せきもんしょう}

(後漢・西暦一四八年)の臨書 (1)

象雲臨

「唯坤靈定位」

今月から、磨崖碑の代表的な一つ「石門頌」を学んでいきます。

陝西省褒城県石門洞の内壁に刻されたものです。褒斜ダムの建設に伴い切り取られて、現在は漢中博物館に収蔵されています。羌賊の侵略を防ぐために断絶していた褒斜道を再び開通させた楊孟文を称えるために彫られた顕彰碑です。

書体は波磔をもつ八分隸で、石質が硬いためか細線ですが、健勁でしなやかな運筆が特徴です。

今まで本欄では、八分隸の典型といわれ品格とともに規矩に適った結体の特徴とする禮器碑を学んできましたが、この石門頌の臨書を通して、さらに隸書の古拙と自由闊達な一面を学んでいければと思います。

作られた詳しい経緯などについては、本誌、昨年十二月号の「書の美について(八)」のなかで、曹全碑とともに紹介していますので、ご参照ください。

佛道崇虚

佛道は虚を崇ぶ

■王羲之・集字聖教序(唐・西暦六七二年)の臨書 (15)

象雲臨

佛道崇虚

『佛道崇虚』

書を学ぶうえで王羲之は避けて通れない古典ですが、一方で王羲之の書を理解することは、簡単ではありません。また王羲之を学ぶことは、書の創作作品をすることに繋がらないと思われがちですが、文字を書くということは、一定の約束事というか、文字の軌道というものがあります。自由創作でもその軌道からは外れ、偏ったものにならないようにするためにも王羲之を学ぶことには大きな意義があります。

今月の「書の美について」は元代の復古主義を掲げ、王羲之を尊崇して生涯にわたって研究した趙孟頫を取り上げました。趙孟頫という王羲之の代弁者の書を通して、王羲之を学ぶことも大変有意義なことだと思います。

さて今月の四文字ですが、「崇」は蘭亭序からの集字のようです。蘭亭序は様々な臨摹本、刻本がありますが、集字聖教序の「崇」は褚遂良系の神龍半印本と相似しています。